

油山の宝物さがし ～アカマツの材を出した頃～

油山市民の森は市民の森協会の作業員さん方がルートを塞ぐ樹木の伐採等の作業をしておられます。そのおひとり日下部さんは油山を市民の森になる以前から仕事の場としてこられました。まもなくご退職とのことで昔の油山について聞かせていただきました。厚くお礼申しあげます。市民の森協会にもご協力頂きました。

とき 2011年3月17日 9時～10時

ところ 市民の森協会事務所



4月の林道

那珂川町に生まれ育ち、70の後半になりました。家は農家で子供の頃はがんづめという草取り機を田の中で押す等手伝いをよくしました。当時煮炊きは薪でした。近くの山持ちの家が木を伐採した後に残した枝を薪に使い、かわりに植樹の時には加勢にいきました。

学校卒業後、近所の人を手伝って山仕事を覚え、2、3年で独立しました。

油山から早良にかけての国有林では西新におられた山師の手嶋さんが営林署及び営林署と契約した個人から仕事をもらっていました。手嶋さんから声がかかり作業をするようになりました。

作業は杉・檜の間伐がありました。またアカマツも伐採しました。昭和20年代はアカマツを炭鉾の坑木、パルプ、船、建築材等として出しました。市場は長浜にありました。建築材は60～70年生の大きなマツでこのような大きな木の伐採は営林署の仕事が多かったです。

尾根筋で大きなアカマツを伐ると馬方さんが道まで出し、それを玉伐りしました。

馬方さんは浮羽から3人で来ていました。その折はカブトムシの森対岸（国有林）の小川のほとりに小屋がけし、人と馬で1ヶ月ほど住み込みんでいました。

当時、現在の管理事務所方向からの林道の終点は現在のカブトムシの森付近でした。牧場は松林と檜植林地でした。

油山では国有林から権利を買って炭焼きをする人もいました。今この近辺で炭焼きはわが家のすぐ上で2、3歳年長の方がしているくらいです。

道具は手伝いをしている時は自前の、手のこでした。が国有林の仕事をするようになってから山師さんが用意してくれました。昭和32年ころチェーンソーを使いはじめ国産はなく外国のものでした。

昭和45年に市民の森ができる時国有林での仕事をやめここの手入れをするようになり今日に至っています。手嶋さんは20年ほど前山師の仕事をやめられました。（聞き手 柴戸）